

協同に生きる

## 私の生協人生を語る

横関 武

(元京都生活協同組合理事長)

聞き手・井上英之 (大阪音楽大学教授)



## 父の「生老病死」という教え

**【井上】** 今回の企画は横関さんのほうから「ぜひ私の生協人生を語りたい」ということで実現しましたが、なぜそういう心境になられたのですか。

**【横関】** 生協人生というより、人間についてですね。生協では、すべて人間が幸せになれるということではありませんから、ひとつの側面というか、大事な運動ではあるけれども、人間回復とか、人間を取り戻すとか、人間の全面的な幸せにとって必要な運動だとは思っていますけれどね。

**【井上】** 生協人生というより人生だというお話がありましたが、『くらしと協同』の読者は生協関係者が多いので、生協人生がどうだったのかを知りたい人も多いと思います。横関さんについては、生協に関わってこられた記録・出版物がいろいろあります。そして、よその人に比べると、いろいろな節目で賀川豊彦と会ったという貴重な体験を持っている生協人ですし、コープこうべの前身である神戸生活協同組合、同志社生協、洛北生協、合併後の京都生協などに、ご本人のみならずお兄さんや奥さんも関わってこられたということがあります。

こうした人生のどんな選択が生協への道を歩むことになったのか、あらためてみずからの人生論をつくっていく出来事からお聞かせください。

**【横関】** 私が生まれたのは1929年です。小学校と中学校は和歌山県の田辺で、13歳ぐらいまで自分の目が人より悪いことに気づきませんでした。これは親も近所の人も友だちもみんなが、目が悪いことを知ったうえで、いろいろ配慮してくれていたのだろうと思いますが、私はあまり頓着せずにやっていたんです。

しかし、田辺中学（旧制）に入った年は、昭和 16 年で、「大東亜戦争」が始まった年です。田辺中学には、配属将校が 4 人派遣されていました。

戦争中は、障害者など兵隊になれない人間は、ごくつぶし、米食い虫という扱いで、それこそ人間としては全面否定されました。私の場合、具体的には、30～50 m 先の標的に向けて鉄砲を撃つ練習をするのに標的が見えないわけです。だから、30～40 度ほど横を向いて鉄砲を構えるんですね（笑）。それで軍刀を鞘のまま抜いて、頭をガツン！と殴られました。

だいたい旧制中学というのは下士官・配属将校を育成するような国策になっていたんでしょね。だから、「国のために役に立ちたければ死んで石油になってしまえ」というわけです。それがショックでした。

いずれにしても、配属将校の軍事教練のたびに立たされたり、どつかれたり、いわば「見せしめ」。国家のいじめみたいなもので、「兵隊になれんやつはこんな目に遭うんや」という状態でした。

そんなことで、学校から帰ると、部屋で 1 人でよく泣いていたんです。心配をかけたらいかんと思って、親にも言えなかったけれども、部屋で泣いていたときに母親に見つけられて、母親は「そんなにつらいなら学校やめるか」と聞きました。私が「やめたくない」と言うと、親父が出てきて…。いまでも私は、親の背中を見て育ったような気がしますね。

親が言ったのは、「生老病死というて、人間というのは誰でも、生まれたときは何も知らんと、どこに生まれてくるのか、どんなところへどうなって出てきたのか、わからんままで出てくるものや。1 年経ち、2 年経ち、年をとって、年寄りにもなっていく。その間に、親兄弟の間で言葉を覚え

たり、近所の人たちにかわいがってもらったりして大きくなっていくんや。つまり、人間になっていくんや。年はそうやってどんどんとっていくものや。けれども、その過程で、病気になったり、特に一生治らんような難病の人もおれば、戦争にとられて死んで帰ってくる人もいる。生きて帰ってくるかもしれん。不治の病の肺病になって、若くして命を終える場合もあるけれども、必ず人間は死ぬ。これは誰も逃れられない。年寄りになったり、病気になったり、障害者になったり、若死にしたりするとしても、遅かれ早かれ、みんな死んでしまう。おまえの場合は、少し目が悪い（小さな頃は鼻につくほど字を近づけると、辞書など細かいものも読めました）ということで、それは一生ずっと付きまとう。だから、少し目が悪いからといって気にする必要は全然ない。配属将校から怒られても、気にする必要はない。好きなことをやったらよろしい」というようなことでした。「それやったら自分の好きなことをやったらええんやな」ということで、納得したわけです。

## 私にとっての戦争の総括とは

【横関】 ぼくは、「死んでしまえ」と言われながらも軍国少年でした。そのひとつの理由は、ぼくらの同期生は、海軍兵学校の 78 期生で、最後の学生なんです。そして、海軍兵学校へ行ったやつの話や陸軍士官学校へ行ったやつの話を聞いていると、海軍兵学校の五ヶ条というのがありました。

陸軍は「捕虜になったら死ね」とか「天皇陛下のために」とか、そんなことばかり言っていましたが、海軍兵学校に行った先輩や同級生の話では、江田島などでは教官が 120 人ほどいて、そのうち職業軍人は

20 人ぐらいで、あとは大学の教員とか数学の優秀なやつとか英語やドイツ語の達者なやつとか、そういう連中だったそうです。その人たちが敗戦になるまで教えているわけです。そして、五ヶ条をみんな一枚ずつもらって、夜、寝床で反省するように寝けられているわけです。

その五ヶ条というのは、「自分の良心に対して恥ずかしくない人間にならなければいけない」とか「そういう軍人にならなければいけない」という反省ばかりなので、「この五ヶ条のどこが間違っているのか」ということが、戦後になってもずっと残りました。大阪で労働しているときもそう思っていたし、同志社へ来るまでも引っかかっていました。

**【井上】**なぜ軍国少年になったかというのは、いまではなかなか解明できない、空気伝染みたいなもので、圧倒的にそうならざるを得ないような状況があったし、具体的なモデルもあったわけです。だから、「なぜ自分は軍国少年だったのか」ということを問うても、なかなか解きにくいと思います。

**【横関】**いまはわかるのですが、そういう軍国時代に障害者だったということが、ひとつの原因だと思います。障害者というのは、家に金があるなしにかかわらず、最も全面否定される階層という立場に置かれた。その目線から物事を見ること、つまり、自分も一番下の人たちのひとりだという目線が変わらないわけですね。

終戦のときの私の教訓としては、腹が減って、食うものがない。戦争中も食うものはなかったけれども、戦後 2～3 年の食べ物へのなさは戦争中よりもひどかったように思います。闇市でしか買えないので、配給だけで生活して飢え死にした裁判官が出たときは、「裁判官みたいな偉い人が、配

給だけで栄養失調になって死んでしまった」ということで、世間の話題になりました。しかし、気の毒がる一方で、一般的には「あんまりバカ正直もあかん。いくら頭がよくても、生活の知恵がなければあかん」という評価でした。

そういうことがあって、私の戦争の総括は、「飢え、差別、暴力＝戦争、この 3 つだけではなくさないと、障害者だけでなく、普通の人たちも戦争で飢え死にしたり、2 番目の兄貴のようにシベリアへ行かされたりする。個人の暴力であれ、集団的な暴力であれ、あるいは国家の暴力である戦争であれ、これだけは許せん。それが無い世の中にしないと、みんな幸せになれへん」という思いなんですね。

そうすると、軍国少年だったということは、この教訓の反対の人間だったのだから、「軍国少年だけにはなるな」、あるいは「暴力を肯定するような人間にはなるな」「弱いものいじめだけはするな」というのが私の生き方になったわけです。

## 思いきるときは 思いきらなアカン

**【井上】**戦時中に中学校で、障害を持っているがゆえに、国からのいじめ、国家のいじめで、人間扱いされずに悔しい思いをしたということでしたが、昭和 16 年というのは小学校が国民学校という名前に変わった年です。それは要するに、「私立ごときが教育ができるか。教育は国家がやるんだ。小さい子どもであっても小国民だから、国家が関与するんだ」ということですし、そのときに三国軍事同盟の記念として、それまでの「唱歌」という科目が、イタリアのオペラとドイツの歌曲をレコード鑑賞する

んだということで、「音楽」という名前に変わりました。

また、大正 15 年に青年学校ができて、日清戦争、日露戦争、第一次大戦の退役将校をもとにして、青年の軍事教練が始まります。それが昭和に入って、19 歳まで青年学校の義務化が始まっていった直後ですね。その意味で、教育が国家にからめとられていくというか、国家が教育の主人公として前面に出てくる時代のなかでの、横関さんの最初の挫折のひとつと言いましょいか、苦難の時期だったということですね。

【横関】そうですね。3 年になると勤労動員に行きました。300 トンの木造船をどんどん造って、輸送船にしました。それで、ぼくら中学生は、その木造船の中の肋骨造りが仕事でした。それを朝から一所懸命やるのですが、そこで働いている海兵団の若いおっさん連中とぼくら中学生（3 年生）がケンカをするんです。あるとき、何かのケンカになって、「貴様ら中学生が、勇気があるんだったら船の舳先から飛び込んでみよ」と言うやつが出てきました。あんまり腹が立つし、ぼくが「飛び込んでやる」と言ってしまいました（笑）。

ぼくらの中学は、入ったときから、一番泳げないやつでも 8 km の遠泳があって、泳げるやつは 16 km の遠泳でした。泳ぐのは慣れているし、「飛び込みぐらいは」と思ったけれども、300 トンの船の舳先から飛び込めということになって、行きがかりでやったわけです。海が下のほうでキラキラ光っているのを見ると、足がすくんでしまいました。目をつむって飛び込みました。

高いといっても 10 m ぐらいだとは思いますが、石に頭をぶつけたようで、骨が砕けたのではないかと思うぐらい固かった。しかし、沈んでから、上がって行って、それからは海兵団の比較的若い連中もぼくらに

は手を出さないようになりました。そのときに「思い切るときには思い切らないかん」というような気持ちがついたんですね。

## 翻訳家をめざして

【井上】いまのお話は、まさに横関さんの真骨頂で、やらざるを得ないときには「ええい、やれっ」という側面が出たエピソードだと思います。

学徒動員は、中学校の関係では、最初は 4 カ月動員ですが、それが通年動員になって、昭和 20 年 4 月 1 日で、閣議決定によって、中学校も高等女学校も実業学校も青年学校も一切、授業が停止になります。そういうふうにして、中等学校の生徒だけが全面的に勤労動員された。つまり、社会に労働力がないというなかでの問題です。だから、原爆で死んでいるのも、圧倒的にそういう人たちが多いんですね。

ですから、いまのお話は、日本の若者が、学業を放り出して、むちゃくちゃに戦争体験に縛りつけられていった時代のひとつのエピソードのように聴こえました。

さて、中学校を出てから、どうされたのですか。

【横関】中学校を出るまでに、私の家に講談社の『日本文学全集』と『世界文学全集』があって、それを片っ端から読んでいたんです。日本文学は、なにか舞台が狭いような気がして、外国文学のほうが面白かった。けれども、当時の訳はぼくら少年にとっては非常に難解だった。だから、もう少し良い日本語にしたいという気がぼくにはあった。そして、4 年生の 8 月に敗戦になったわけですが、その翌年の 3 月に「翻訳をしようと思ったら外国語をもう少し勉強せなあかん」ということで、三高だけ受けまし



た。ところが、体格検査（身体検査）が先にあって視力の問題で受ける資格がないということで、あきらめました。

そうすると、9月過ぎ頃から、海兵、陸士、幼年学校、予科練などへ行ったやつが全部帰ってくるわけです。帰ってきた連中がみんな、「わたしの人生はもう台無しじゃ」なんて言って、荒れるものだから中学の先生たちも授業はほとんどできない。それで、ぼくらの学年は「4年で卒業してもよろしい。5年に行ってもよろしい」ということになって、ぼくは三高にはいけなかったのので5年組に残りました。

その当時の校長と教頭が、たばこを吸ったりして荒れている生徒に対して、「校則に反するやつは退学させる」ということをいだったので、ぼくらは腹を立てました。ぼくなんかもその首謀者かもしれませんが、講堂に全学生徒を集めて、「校長と教頭は、戦争から帰ってきてヤケのやんばちのやつに何ということをするのか。自分らがやられる前に、彼らを追い出してしまおう」ということで、ストライキをやったのが昭和21年の4月の終わりぐらいです。

ふた月ほどしてからわかったことですが、校長などの場合、生徒からストライキされて追放されたら、一生、教職に就けないことになったということでした。それで、「一生、教職に就けんなんて気の毒なことをしたなあ」と反省しました。

もうひとつは、終戦の翌日に配属将校に謝らせようと思って家へ行っただけです。ところが、いない。もう夜逃げした後でした。「こんな卑怯なやつが」と、がっかりもしたし、腹も立てながら帰ってきたけれども、陸士の同級生の連中からは、「肺病になった」ということで、バカにされて、本人もかなり僻んでいたらしいということを後で聞いて、「かわいそうやな」と思ったりも

しました。

## 挫折そして賀川との出会い

【井上】横関さんは京都生協で、どちらかといえばイタリアとの関係づくりをいろいろやったりしましたが、いまのお話を聴いていますと、小さな頃から広い舞台への憧れがあったことがよくわかりますし、ストライキにしても、後に「社会運動としての生協」に飛び込む下地という側面もうかがえるエピソードだったのではないかと思います。

生協で働く前に、どのように学んだり働いたりしたのですか。そのなかで、生協への道がどのように広がってきたのですか。

【横関】「外国文学を翻訳して、もっとわかりやすく読めるようにしたい。それが自分のライフワークや」というのが少年の夢でしたが、それに挫折しました。その後、体格検査がなかった大阪外語専門学校（後の大阪外国語大学、現大阪大学）に入ったんですが「目が見えなくなったら、“あんま”にしかねれんぞ。ちょっとでも見えてるんやから、長く使うほうがええぞ」ということで、入って2カ月足らずでやめました。

親は「家にいて、好きなことをせえ」と言うのですが、「好きなこと言うたかて、好きなことはやめさせたくせに、何をせえと言うんや」という気持ちになりました。

しかし、「よく考えてみれば、親は先に死ぬわけやし、自分で食べていくことをしないと親孝行にもならんやろ。それに自分自身も納得できん」ということで、昭和22年の秋に家出をしました。家出をして、市電の終点の鶴町（大正区）に着いて、そこで働いている土木工事の人に組頭のとこ

ろに連れていってもらって、「このぼんが現場で一緒に働かせてくれ言うてるけど」と言ってくれました。

5年近くは現場で作業をしていたと思います。その頃の飯場というのは、日銭をもらうと酒を飲んだり、博打をしたりと、そういうしょうもないことをするやつもいたけれども、みんな、働きたいわけです。働いて、なんとか人並みの生活をしたいという連中ばかりです。ケンカや博打はするけれども、いいやつばかりで、悪いやつは1人もいない。

そんななかで、「こんなに働ける身体を持ち、また働かないと食えない連中がなんで仕事がないんや」と思うようになりました。雨が降ったら仕事がないし、大手会社の下請けの下請けだから、ひと月に15～16日しか仕事がないんですね。

ぼくは「半月も遊んでいて、食えるわけがない。なんで、もうちょっと仕事がないのか。こんな焼け野原なのに、仕事はなけりゃならんはずや」という思いがあって、「世の中、どんな仕組みになってるんや」ということが疑問になってきました。「語学はやめるとしても、そういう勉強をもう一度しないことには、この連中に日の目が当たらんやろ」という思いでいたところに、賀川豊彦が来たわけです。

それまでに、昭和23年にヘレン・ケラーが大阪へ来て、扇町公園だったと思いますが、講演があって、ぼくは仕事をやめて、聴きに行きました。講演といっても、本人がしゃべるわけではなくて、通訳する女の人がしゃべるのですが、ヘレン・ケラーは「失われた機能を悲しむよりも、残った機能を活かして生活する。私は、目も見えないし、口もきけないし、耳も聴こえなくて、不自由ですが不幸せでは全然ありません」という話をしてくれました。「この人はな

んと偉い人や。よく生きているなあ」ということで、感心というより感激して、元気が出て、飯場へ帰った覚えがあります。

【井上】なぜヘレン・ケラーの講演を聴きに行こうと思ったのですか。

【横関】目も見えない、耳も聴こえない、口もきけない、三重苦の人だということでヘレン・ケラーは、当時の日本ではよく知られていましたよ。そのヘレン・ケラーと出会って、元気をもらいました。

また、賀川豊彦が仕事場に来た頃は選挙が多くて、杉山元治郎という社会党右派の代議士の選挙応援にきていました。そこで「働き人に主はいませり」という命題で講演をしたんです。

【井上】杉山元治郎は、もともと福島で農民福音学校をやっていました。そして、その杉山と賀川豊彦のことを、和歌山のキリスト教関係者が『新人』のなかで「すばらしい新人が現われた」と紹介したんです。杉山は、その記事を読んで、農民福音学校をやめて、戦前に賀川豊彦のところへ来たんです。その後は、農民組合づくりを一緒にやってやり、いろいろな活躍をする、という関係でした。

【横関】2回目に来たときだったか、賀川さんが杉山さんのところ（生野区）へぼくを連れていったことがあります。それで一度だけですが紹介してもらいました。ぼくは関心が全然なかったけれども、賀川さんの「働き人に主はいませり」というのは、いまでいう福祉国家というか、「社会事業によって世の中を幸せにしなければいけない。そのためには諸君に頑張ってもらわないと困るのだ」という話でした。

ぼくの現場の仲間に、50歳ぐらいの作業員が5～6人いて、ぼくが「社会事業って、聞いたことあるか」と質問すると、みんな「知らん」と言うのですが、1人だけ、

「わしは昭和の初め頃に、にぎり飯2つもろたことがある」と言うんです。後で考えると、たぶん救世軍からにぎり飯をもらったのだろうと思いますが、ぼくは賀川さんに「50いくつも生きてきて、にぎり飯2つぐらいで何が世の中よくなるかい。社会事業いうてるけど、あんた、山師と違うか、話はこれぐらいにして帰ってくれ」と言いました。

そのときはそれで別れたのですが、たしか2カ月か3カ月ほど経ったときにまた選挙があって、そのときにもまた来て、「なんでそんな再々来はるんや」と聞いたら、「杉山元治郎という政治家の応援演説に来たんや」ということでした。

そして、「君は何をしたいんや。何を考えとるんや」と聞かれたので、「わしは日雇い労働者をしているけれども、せめて20日ぐらいは働けるようにと思うぐらい仕事がない。それで、どんな世の中になっているのか。わしはそれが知りたい。それを勉強したいと思っているけれども、目が悪いから勉強のほうはあきらめた」というようなことを言いました。すると、「目が少々悪いというても、わしもトラホームで目が悪いけれども、目をあまり使わなくても勉強できるところがある。本当に勉強したいのか」「したい」「それやったら京都へ行こう」ということで、京都へ連れてきてもらったんです。

## 賀川に連れられて同志社へ

【井上】実際に京都に連れてきたんですか。

【横関】そうです。52年の秋頃に同志社の神学部ね。そのときの神学部長が大下角一さんという、ハワイ二世の人です。その人に紹介されたというか、部長室に連れていって、「とにかく勉強させてやってくれ」

と頼んだんですね。そして2人は私に「これから労働者伝道をしたいが、わしの知ってるなかにもなかなかおらへんのや」というような話をしていました。ぼくはとにかく目を使わなくても勉強できるのならいいと思っていたので黙って聞いていました。

【井上】同志社では何を勉強されたのですか。

【横関】賀川さんと大下さんは「神学部の3年生に編入学せよ」と言いましたが、私は「いやだ。1年生から入って、世の中も知りたい」ということで、ちゃんと1年生の試験を受けて、1953年4月に1年生で入りました。大下さんには、「世の中がどうなっているのかを知りたいので、経済や政治の授業も聴講できるようにしてほしい」と頼んで、もちろん神学部の授業にも出ましたが、1年間は聴講して歩きました。

1年生で入ったとき、ぼくは24歳だったと思います。学生といっても、同い年のやつは大学を卒業するか、とっくに卒業している時期です。それで、同志社に入ると、ぼくも知らないような田辺出身の下級生の学生がよく来るわけです。たとえば、がんこ寿司の社長の小嶋君は田辺の少し田舎の出の人ですが、彼などもいましたね。彼は3年生だったか4年生だったか、とにかく、田辺ではずっと後輩ですが、大学ではぼくより上級生でした。ストライキをした話などを知っているんです(笑)。

それ以外にも、ぼくより1～2級下で、立命館大学で憲法を教えていた山下健次君などもいました。

【井上】田辺で有名だったのでしょうか(笑)。

【横関】中学時代の戦後の1年間の間に、ストライキ以外に野球部づくりもやったんですよ。野球部をつくりたいというので、たまたま巡業に来たシンガーの池真理子を引っ張り込んで、講堂で歌を歌ってもら

て、テラ銭をもらって、野球部の資金にしようというわけです。そういうことを考えるのが好きなやつもいて、「よっしゃ、やるやないか」ということになって、交渉して、切符は当時の金で10円だったか、その半分は池真理子さんに渡して、半分はこっちにもらうということで契約をして、田辺中学の講堂に全校生徒を集めて、公演をやりました。その野球部からは巨人の監督になった岩本とか寺本とかが出たんですよ。甲子園にも出ました。

それから、田辺中学の創立百年祭では百年記念劇のシナリオが募集されたんです。それに私も、戦後の闇屋とか、勉強したいけれども進学できない同級生の姿などを題材にして、「芽ばえ」というのを書きました。それが一等になって、同級生から下級生のなかで芝居をしたいやつを集めて、父兄からおばさんのカツラなどを借りてきて、総勢30人ぐらいの演劇をやったんです。二幕物でした。

**【井上】** そういうことをやっていたという噂や人脈が、後に出てくるわけですね。

**【横関】** それから、戦後すぐに、校長を追い出した後、新しい校長が来るまでの間に、「天皇制について」という全学の講演会をやりました。それも含めて、全学の生徒を集めた企画は5～6回やっています。

**【井上】** 戦争直後の中学で、スポーツや文化が一気に花開いたんですね。でも、どうして生協をつくろうということにならなかったのですか。当時は学用品がないから学校生協が一気にできていく時代ですが、そのときは生協との出会いはなかったんですね。

**【横関】** ありませんでした。

**【井上】** 学んだものをどう活かそうとしていたのですか。

**【横関】** ぼくの知りあった学生たちはみんな自治会をやっていたんです。自治会は学

生運動ですから、自治会をやっている連中は、「自治会が一軍で、二軍が生協をやっているんや」という言い方をしていました。私の学生時代は自治会活動ばかりだったので、生協についてはあまり関心がなかったんです。自治会活動といっても、裏のことばかりで、パクられたやつを中立売署にもらいに行ったりしてね（笑）。いわゆる救援活動です。ハンチング帽をかぶって、乗馬ズボンみたいなやつに地下足袋を履いて、神学部にあたわけです。労働者時代の衣装そのままです（笑）。

## 社会学部に転部して

**【井上】** 卒論のテーマは何でしたか。

**【横関】** ぼくの母方は三重県の伊賀上野ですが、ここは和傘と組紐の産地なんです。京都の組紐の7割ぐらいが伊賀上野で作られていたんです。ぼくも母方の家にちょくちょく遊びに行きましたから、その市役所の連中やその知り合いなどが「どうせ卒論を書くなら、ここの地方産業のことを調べて、書いてくれへんか」と言いまして、それを卒論にしました。

実は2年生のときに学生運動へのめり込んだこともあって当時神学部長の大下さんに相談して、大下さんが島田啓一郎さんにも言ってくれて、「社会学部の福祉学科だったら目をそれほど使わなくてもいけるのではないか」ということで、社会学部の福祉学科に転部しました。

私が「信仰を持ってない。牧師にならない」ということで転部したのは、「そんな、あるようでないようなものを信じることなんてとてもできない」ということと、「牧師は寺の坊主と同じで、御布施をもらって生活する。しかも神の代わりに説教する。私は、汗を流して働いて食うていくことが性



に合うてるんや。だから、神さんの代わり  
に説教して御布施をもらって食うていくと  
いう仕事には就けない」という理由です。  
それを賀川さんと大下さんにはっきりいっ  
たんです。

## 生協をライフワークとして 選んだのは

【井上】 出会いと学びのなかで、神や信仰  
が遠くなって、社会環境をどうつくるかとい  
う関心にぐっと近づいたわけですね。

なぜ生協で働こうと思ったのか、なぜ働  
く場が神戸生協だったのかなどについてお  
聴きしたいと思います。

【横関】 やっぱり敗戦が大きな転機になっ  
たと思います。そのときに私が思ったのは、  
「なんで弱いものいじめのない世の中にな  
らんやろか」ということでした。その思  
いは戦争中からあって、戦後になっても、  
「飢えと差別と戦争のない世の中になっ  
たらええなあ」と願ったわけです。

戦後、ライフワークとして生協運動に絞  
り込んだ理由のひとつは、賀川豊彦に会っ  
たことです。その前提としては、うちの親  
父が言ってくれた「生老病死」という考え  
方です。もうひとつの力は、ヘレン・ケラー  
が大阪に来たときに聞いた話です。それが  
私の大きな励ましになりました。だから、  
現場で働いていたとき時代は「私の目なん  
か、たかが知れてるやないか」という思い  
で生きてきたわけです。

私は日雇い労働者として生きてきたか  
ら、「世の中を変えなきゃいかん」と思っ  
ていました。そのためには正義感と勇気で、  
自分を勇気づけさえすれば闘えるという自  
信はあったのですが、それを支える理念を  
持っていなかったから、理念を知りたかつ

たんです。そこで学生時代に、学生運動  
を通して学生たちと左翼の先生方から非常  
に大きな影響を受けたんです。そして、思  
想としてはマルクス・レーニン主義の「計  
画経済で世の中をよくしていく」というこ  
とに憧れたわけです。その際、初期に思想  
として影響を受けたのはシドニー・ウェッ  
プでした。

転部してから、大下さんの勧めで、島田  
啓一郎さんの講義を聴きました。島田啓一  
郎さんは生協論や社会思想史の講義をやっ  
ていましたが、私は生協論よりも社会思想  
史のほうを取りました。

## 神戸生協との出会い

しかし、島田啓一郎さんと賀川さんは、  
「職業として生協というものがある。神戸  
生協で研修しなさい」と言って、神戸に連  
れていってくれました。そのときに賀川さ  
んが言ったのは、「灘生協は、第一次大戦  
で船成り金になった那須さんが、社会事業  
として生協をやるためにつくった。一方、  
神戸生協は労働者がつくった」ということ  
でした。そして、涌井安太郎さんが「君の  
ように学生運動をやった人間は、灘では無  
理だから神戸に行きなさい」ということで  
神戸生協を紹介してくれたんです。

そして、3年生になって半年ほど経っ  
て、島田さんが神戸生協に連れていって  
くれて、それから月に2～3回研修のために  
神戸に通いました。

福祉学科の2年間はそういうことをやっ  
ていて、「卒業と同時に神戸生協に来なさ  
い」ということになって、それを約束しま  
した。

## 神戸生協から 同志社生協の支援に

そういうことで、卒業と同時に神戸生協に入りました。そして3カ月経った頃に、同志社から駒井四郎さんと学友会の樋口君が来ました。樋口君は、経済学部委員長か何かをやっていた、いい青年でした。そのときに私が涌井さんに呼ばれて、「同志社に帰ってやってくれ。母校の生協がつぶれかかっているんや。君の意思があるなら、3年間、帰ってもよろしい」ということになったんです。私は、同志社の学生運動にもずっと関係してきたので、「そんなに困ってるんだったら」と思いました。

駒井さんは、神学部の先輩で、東京の江東消費組合で専務をしていて日本協同組合同盟（後の日本生活協同組合連合会）を経て同志社に帰ってきた人です。

それで私は、神戸生協から3年間の出向というかたちで同志社に帰ることになりました。

## 京都生活協同組合の誕生

なぜ京都生協が生まれたのかについて少しお話ししたいのですが、賀川豊彦は「静かなる革命だから」という位置づけで生協を私に勧めたわけです。つまり、「自分は平和を絶対にやるんだ」ということですね。私は、労働者時代に賀川と会って、同志社を勧められたときに、「あんたは戦争中、何をしていたのか」という質問をしました。そのときに彼が「私は反対をしきれなかった」という反省を言ってくれたので、私は彼を人間として信頼した。

賀川さんは、日生協を再建するときに、みんなが賀川を会長に推薦したので受けた

けれども、絶対に平和を大事にしたいという彼の一念もあって「平和とよりよき生活のために」が日本の生協の標語になっているわけですね。

再建の発起人会では、「平和」を先に持ってくるか、「よりよき生活」を先に持ってくるかで、ずいぶん揉めたらしい。それで賀川さんは、「とにかく平和が先だ。第一次大戦でも第二次大戦でも生協は全部つぶされた。生協ぐらいの運動でも、戦争になればつぶされるんだ。だから、自分はこれからは絶対に戦争に反対する。平和を先に持ってこなければ、くらしもへったくれもあつたものではない。命の問題だ」ということで、平和を主張して、「平和とよりよき生活のために」にしたのだということを、私に懇々と語ってくれました。

したがって、賀川豊彦が「自分は反戦を命を懸けてやるんだ」ということだったので、彼を信頼して生協に入った、という面もあるんです。

## 能勢克男・西村<sup>ひろみち</sup>豁通 両氏との出会い

洛北生協をつくろうということになったのは、60年の春に、私が同志社の再建を終えて、能勢克男さんのところへ「神戸に帰ります」と挨拶しに行ったときに言われたことに、感動してしまったんですね。それで、「京都でつくります」ということで、涌井さんにも断って、ちゃんと筋は通したつもりですが、いずれにしても、そのときに能勢さんに説得されたのは、「男の縦社会に対して、婦人の参画がないと、民主主義は成立しない。本物の民主主義はできない。いくら立派な憲法ができて、一つひとつの項目を闘いとらなければならない

だ。闘うといっても、激しい闘いではなく、みんなが戦争についての認識をきちんと持とうと思えば、民主主義的な土壌を京都でもつくらなければならない。しかも、京都にはそういう伝統があるんだ」ということで、自分がやってきた戦前の京都の消費組合について話してくれました。そして、「それを継げ」というのが私に対する要請だったわけです。能勢さんの“頼もしき隣人たらん”という生協観を引き継いで婦人理事たちと相談して“組合員憲章”に仕上げたのです。

それから、当時、同志社生協の理事長をやっていた西村豁通さんですね。彼は当時、私が「地域生協をやるんだ」と言ったときに、賛成してくれました。その理由としては、「自分は、日本の労働運動を社会政策の面からずっと研究してきたが、日本の労働運動はこれだけではだめだ。だから労働者福祉に懸けるんだ」ということで、考え方を労働者福祉のほうに傾けていた時期だったんですね。

そして、西村さんは、そういう労働者福祉の面から、地域生協をつくることに賛成したわけです。能勢さんも西村さんも、東大を出ているけれども、なかなか肌が合わないんですね。能勢さんのほうが文化人ですから、人間の幅というか、トレランスというか、寛容の気持ちがあるんですね。

私と西村さんが気性として合ったのは、彼は中学生時代に、通学中に電車に轢かれて、片方の足首が飛ばされてしまったんですね。下駄の歯が線路の溝に引っかかって、片足がちぎれているんです。しかも、彼はそのことを誰にも知らせまいとするわけです。私は、自分の目が悪いことを、人に言ってしまうことはしないけれども、わかっている人にはわかってもらおうということで、ずっと仕事をしてきていますが、彼は隠す

んですね。隠すけれども、ぼくには言うわけです。そういう面では、彼は、障害者としての人間の痛みを知っている人間なんです。私はそういうふうにして、信頼しているわけです。

西村さんに同志社生協理事長を引き受けてもらったのは嶋田啓一郎先生を大学生協連会長に送り出すことを決めて、その後任として要請したことに始まるんです。当時同志社生協の再建と京都の大学生協の建設にとりくんでいた専務の私は、地域生協づくりの課題を同時に抱えて、京都の生協運動の見通しを模索していた時期でした。

私は同志社生協の経営については、西村さんにはご心配はかけない、西村さんの専門の社会政策から生協の社会的位置づけの理論的な指導と協力を願いたい、などの条件で新しい理事会のトップにすわってもらいました。そこで念願だった西村新理事長のもとで視野のひろい勉強会、研究会を職員、学生理事たちで定期的に開くことができるようになり、成果をパンフとして出せるようになったわけです。このことがその後の「くらしと協同の研究所」の創立につながったと思います。

もうひとつ忘れられないのは、日鋼室蘭生協と新潟労働者福祉協議会の調査を西村さんとやったことです。この調査で職域生協の長所、短所を知ることになります。というのも生協は個人の意思で加入するものであって組織加盟は間違いだということ、一人ひとりの思想信条の自由の大切さ、くらしを守る事業の位置づけと民主的運営が生協の命であることを二人で再確認し、生協のそうした目的や基本的な性格を間違えないこと、兵站部機能を請け負うものではないことを学んだわけで、後の洛北生協設立に際しては大切な原則としましたね。そういうつながりで西村さんには地域生協設

立後も監事としてお世話になりました。

## わたしにとっての生協とは

生協についての私の位置づけという点では、賀川豊彦は生協を「静かなる革命」と言ったし、能勢さんは「頼もしき隣人たらん」ということで、徹底した人権と民主主義から生協を位置づけて、戦前からやってきました。その意味では、能勢さんと西村さんは、基本のところで「人の痛み」ということをとてもよく知っている人たちだと、私は思っています。だから、私にとって生協とは、人の痛みを知る人間、つまり、それは女性ですが、女性中心の民主主義をつくらなければいけないという能勢さんの話に共鳴しました。そういう意味で生協に対する私の願いは、「生協は人の痛みを知る者の集まりである」ということです。それをいろんなところで話してきました。生協を私は「障害者であろうが何であろうが、社会的弱者の立場に立てる人間の集まりだ」というふうに捉えています。

そのような私からみると職員一人ひとりが、自分が言わなければならないこと、しなければならないことに対して、自分との闘いが足りないように見える。職員は大卒ばかりで利口だし、正義感もあるのですが、いざ自分との闘いで勝負になったときに、「一人は万人のために、万人は一人のために」ということへの信念みたいなものが非常に薄れているように思えてなりません。

若い人たちは、自立する気持ちもみんな持っているし、情報をたくさん持っているから、能力としても、私らの時代よりも高いように思うけれども、目的というものの、つまり、「平和とよりよき生活のために」とか「一人は万人のために、万人は一人の

ために」という万国共通の働く者の願いというか、自分もそのなかの一人なんだという仲間意識というか、連帯意識というか、この辺についてもっと一歩踏み出してくれへんかいな、という思いが非常に強いんですね。国際協同組合年のこの年に考えてほしいと思います。

**【井上】**「生協のなかに人の痛みがわかる人間集団としての活動が求められるし、若い人に対して創造性や連帯意識が非常に弱いように思う。そういうことを克服するような国際協同組合年になるように、生協がイニシアチブを発揮してほしい」という思いが、いまのお話のなかにあったように思います。ぜひ私たちも国際協同組合年を豊かにしたいと思っています。きょうはどうもありがとうございました。

### <関連書籍>

- ・『ところで、どうしたはんの?』（清風堂・1995年）
- ・『頼もしき隣人たらん：あたらしい個性ゆたかな協同の時代へ：京都生活協同組合の30年』（京都生協・1996年）
- ・『生協運動思い出集』（コープ出版・2003年）
- ・『市民生協の創設と発展』（生協総研レポート No.50・2006年）
- ・『京都の大学生協史「大学の協同を紡ぐ」』（コープ出版・2012年）
- 他